

受付番号

留学・研究計画書

氏名 古川 文美子	留学機関名 ハサヌディン大学
留学先国名 インドネシア共和国	留学期間 西暦 2010 年 10 月 ~ 2012 年 10 月
研究テーマ 東南アジア島嶼部におけるマングローブ植林地の持続的資源利用に関する環境評価	
研究テーマの説明 (テーマの学術的・社会的意義についても記載してください)	
<p>【背景】マングローブ林は熱帯沿岸域に住む人々の生活と生業を長期的に支え、地域に根ざした文化を涵養してきた重要な資源である。しかし、東南アジア各国は 1980 年頃までマングローブ林を薪炭材や養殖池転用などの資源開発に終始していた。だが現在では、沿岸域生態系におけるマングローブ資源が人間生活もたらす価値や、マングローブ林が消失することによる人間生活への悪影響が取りざたされるようになった。そのため、マングローブ林の開発には規制が図られるようになってきている。90年代半ば以降になるとマングローブ林の保護と再生が図られる時代へと変化してきた。【現状把握と問題提起】申請者は、植林事業が行われた地域の現状を把握するため、2008年7月から10月にかけてインドネシア共和国スラウェシ島シンジャイ県、2009年3月から5月にかけてインドネシア共和国カリマンタン島、フィリピン共和国東ネグロス州において沿岸植林事業の調査をおこなった。【調査結果】1990年以降、東南アジア島嶼部では資源管理に関する地方分権化が進み、地方住民による伝統規範や慣習法によるマングローブ資源の管理と、それを考慮しない政府による画一的な伐採規制との間で対立が生まれている。そのため植林事業の企画段階で、地域のマングローブ林の所有・管理・利用に関する制度と習慣を、歴史的背景に基づいて明らかにし、それを政策にうまく組み込む必要がある。また、マングローブ植林地は、主に植林実施面積をもって量的にのみ評価されてきており、生態系の修復程度といった質的な修復は考慮されていない。そこで、面積のみを評価するのではなく、人間の影響を考慮した環境評価をすることが重要であると考えられた。【研究内容】留学予定先の南スラウェシ州は、地方政府による生態系保全を目的としたマングローブ植林事業が盛んな地域である。しかし、伐採禁止のため植林地は過密状態となっている。申請者は、植林されたマングローブ林は放置することでの保全ではなく、地域住民による利用と管理があることで持続的な資源利用とマングローブ生態系の保全を可能にするのではないかと仮説をたてた。そして、この仮説を検証するために植林地の環境の修復程度を、物理化学的方法による測定結果ではなく、人間活動を含めた生物による環境全体・総合的にマングローブ林のモニタリングが行える環境評価の方法を確立したいと考えている。今回「松下国際アジアスカラシップ」に申請者が応募した理由は、マングローブ林は人間活動に影響を受けやすい生態系であり、政策や住民のマングローブ林の利用方法といった社会的側面抜きに、生態環境について考えられないからである。申請者は、現地の大学に留学する事で、生態調査を専門分野とするカウンターパートとともに留学先のマングローブ資源に関して社会的側面から研究を行っている学生と共同研究を行うことを予定している。また、環境評価方法の確立により、同様な手段でもってマングローブ資源がある地域の多くに対し、地域社会が抱える問題や地域開発問題に、多面的かつ重層に貢献できると考えている。</p>	